# 曹錕・吳佩孚集團の興亡

松尾洋二

序
一　曹錕・吳佩孚集團の形成
二　王寵惠內閣の成立
三　曹錕・吳佩孚集團の動態構造
四　王寵惠內閣倒壞の意味するもの

## 序

第三革命後、吳佩孚は曹錕の信任を得て嚴しい軍事訓練により、自らの統率する第三師を精銳化し、一九一六年九月に曹が直隸督軍に就任してから五箇混成旅を編成した。これらの武力をもとに一九二〇年七月には安直戰爭において段祺瑞の率いる安徽派を打倒し、二二年四月には第一次奉直戰爭において物量豐富な張作霖の奉天派に勝利した。(1) この間、吳は安徽派・奉天派に對抗すべく巧みに反日政治宣傳を行い、また、五四運動の波を受けて國民大會及び國是會議を提唱した。このことは軍事的に湖南省における安徽派軍閥張敬堯驅逐戰爭にみられるように吳に有利に働くとともに新文化運動・五四運動の活動的な部分と吳との接觸をもたらした。こうして、吳の第三師には湖北學生連合會の募集により、學生約八十名が入隊したり、(2) あるいは、吳自身〝革命將軍〟と呼ばれるほどの稱贊をあびたりする(3)のである。

だが、彼はそのわずか數年後の一九二三年二月の京漢鐵道ストに對する大彈壓を通じ、國民革命期には最大の反革命となり國民革命軍に敗北していった。人はこの吳佩孚の軍事政治的榮光から悲慘への轉落・轉換の餘りの急激さに驚きを禁じ得ないであろう。(4)

この轉落・轉換をもたらしたものは何であったのか、この轉換の正確な時期はどの時點におけばよいのであろうか。轉換の直接的な契機となった事件は何であったのか。いかなる力がこの轉換をもたらしたのであろうか。それは直隸派內部の力なのか、それとも外部の力なのか。その力はどのような動態構造をもっていたのであろうか。さらにこの轉換は逆に直隸派にいかなる事態をもたらしたのであろうか。

同乘した護衞兵が前を行く馭者をなぐった。馮玉祥の兵隊は決してけんかせぬ。吳の兵隊にはまだ、その躾(しつけ)が無いらしい。その後、町の人々に（吳佩孚軍の）兵士の行動を聞いたのであるが甚だ評判がよい。「わるいことはやりません(5)が少々威張りますね。」

というその後の吳佩孚と馮玉祥の運命を奇しくも暗示するかのようなエピソードは一九二二年、第一次奉直戰爭後、馮が河南督軍として開封に駐屯し、吳が直魯豫巡閱副使として洛陽に駐屯していたとき、清水安三が吳を訪ねたときのものである。

歷史はときとしてすぐれた觀察者の直觀を通してその後の展開を豫示することがあるのであろう。

だが、我々は吳の轉落・轉換を考察對象とし、先の諸問題を解明するのに直觀に賴ることはできず、明確な方法論を持たねばならないであろう。

およそ北京を握るような大軍閥であれば、その集團のすべての活動・政策が從屬するような「中國統一戰略」（以下、中國戰略と略稱す）を持っているであろう。中國戰略には對外面では外交關係及びとりわけ借款獲得の問題が從屬し、對內面ではその軍事政治集團內における路線・指導權をめぐる爭い、すなわち、北京における政治が從屬する形で連動している。

『晨報』一九二二年十一月十九日「吳佩孚最近之態度」なる記事に吳のスポークスマンの談話の形で第一次奉直戰爭後の吳の中國戰略が出ている。まず、

吳は統一問題は二年以內に必ず達成可能だと考えている。吳は西南に對しては和平を、東北に對しては武力を用いる。

と述べている。これは當該時期における中國の軍事政治情勢を如實に反映したものである。すなわち、北京政權を握る大軍閥及び廣東を握る廣西派軍閥あるいは孫文の政治力を關內における二極とし、これに日本帝國主義をバックにした奉天派軍閥が加わって全中國における三極構造を形成していた。吳の當該時期における中國戰略は關內における和平統一策と關外に對する武力統一策の統合されたものということができよう。

ついで該記事には關內和平統一策の根據として、

江南（ママ）は近ごろ頗る中央に傾き、雲南の唐繼堯・貴州の袁祖銘・廣東の陳炯明・湖南の趙恆惕はみなひそかに中央と氣脈を通じており、四川・廣西はまだ混沌としているが他日また容易に收拾できよう。西南は自主という形式を取り消していないが、精神的にもしだいに接近してきている

點を上げるのに對し、關外武力統一策については、

東北に至っては奉天派張作霖は吳に敗れてから將校を選び兵卒を募集し、軍費を調達し、兵器を購入するなど種々の準備に全力を注いでいる。だから、彼が再戰と復讐の擧に出ることはすでに豫見できるのである。そして、特に大患をなすのはその親日行爲である。……張は馬賊上がりで大義を知らない。苟しくも復讐できるのなら、亡國も顧みない。だから、武力で撲滅すべきなのだ。

とその要因を述べている。

この一九二二年秋における吳の中國戰略は周知の如く遲くとも翌二十三年三月には重大な轉換をみせている。すなわ

ち、關内の和平統一策から武力統一策への轉換である。

當該時期における中國戰略をあいまいにし、北洋軍閥であれば、必ずいつでも武力統一策をとっているとするなら、當然のことながら、中國戰略の立案者たる參謀格の人物の存在にも眼はいかず、中國戰略の轉換にも精神は集中せず、ひいては、この戰略轉換をもたらすことになった諸要因にも考察は及ばないであろう。

中國戰略轉換には一般的には內因と外因の二つの可能性があろう。この轉換が二十三年三月段階でなされたのであれば、當然その最大の要因として二十三年二月の廣東における孫文による大元帥府の成立という外因を上げられよう。だが、筆者の考察によれば、吳の武力統一策への轉換は通常考えられているよりはるかに早く、遅くとも二十二年十二月にはなされている。又、『密大日記』によれば、當該時期における奉直再戰の動きは否定されている。(6) つまり、奉天派の動きに何らかの變化が起き、そのために轉換がなされたのではない。したがって、我々はこの轉換の要因を直隷派內部に求めざるを得ないのである。

ここで題名に使用した〝曹錕・吳佩孚集團〟なる語について說明を加えさせていただきたい。第一に直隷派軍閥としなかったのは馮國璋をリーダーとする集團と區別するためであり、第二に吳佩孚集團としなかったのは吳を有力な成員とするこのグループの動態構造を把握するには曹錕・馮玉祥の存在を無視し得ず、とりわけ後者をこの集團の中に組み入れて考察しなければ解明不能だからである。第三に軍事集團としなかったのは吳の政策面を代表した人物や吳の政策へ結集していった部分をも考察對象から排除したくなかったからである。最後に曹・吳軍閥としなかったのは軍閥という固定的靜態的價値觀から一旦離れてその集團の構造及びそれに對する評價をも含めて動態的にとらえてみたいという筆者の意向を表わしたかったからである。したがって本稿で簡單のために用いるであろう直隷派あるいは直隷派軍閥とあるのは曹錕・吳佩孚集團の謂である。

軍閥史研究はややもすれば、そのあまりの離合集散の激しさと複雜さのゆえ、簡略化して當該時期におけるその集團の

重要な成員を考察外においたり、中央政府の動向に決定的影響を與える可能性のある首都周邊の軍事配置や部隊の擴大・改編正規軍化を輕視したりして軍事面の靜態的整理に陷り易い。また、國會・內閣・大總統等の政治機構の變遷もそのもつ意味をつかむのではなく單なる整理に陷り易い。だが、あくまでも、中國戰略への諸要素の重層的統合關係の中にこそ、軍閥政治の鍵が存するのを確認しつつ、以下、中國戰略の轉換がなされたであろう第一次奉直戰爭終結後から、一九二三年三月までの時期を吳佩孚系內閣の頂點に位置する王寵惠內閣の成立・倒壞と曹錕・吳佩孚集團の動態構造及び兩者の連動性に焦點をしぼって考察し、先の課題に答えていきたい。(7)

## 一　曹錕・吳佩孚集團の形成

第一次奉直戰爭後、一九二二年後半における曹・吳集團の動態構造を把握する準備として簡單に該集團の軍事的形成過程及び地盤の擴大にふれておきたい。

曹・吳集團は軍事的に二度にわたり擴充した。一度目は一九一六年九月、曹錕の直隸督軍就任後の二・三年間であり、第三革命の四川における戰鬪で傷ついた第三師が吳の指揮に委ねられて精銳化するとともに以下の五箇混成旅が作り上げられた。直隸第一混成旅（旅長王承斌）・直隸第二混成旅（旅長閻相文）・直隸第三混成旅（旅長蕭耀南）・直隸第四混成旅（旅長曹錥）・直隸第五混成旅（旅長商德全）である。曹錕の混成旅を除き、他の四旅は吳の指揮に從った。(8)

二度目は一九二〇年七月の安直戰爭の時で安徽派軍隊の大量の投降を受け入れ、これを改編することにより擴充した。直隸第一混成旅を第二十三師に、直隸第二混成旅を第二十師に、直隸第三混成旅を第二十五師に、直隸第四混成旅を第二十六師に改編し、それぞれもとの旅長が師長に昇格するとともに、第九師（師長陸錦）、第二十四師（師長張福來）が編成され、さらに補充第一旅が第十二混成旅（旅長葛樹屛）に、補充第二旅が第十三混成旅（旅長董政國）に、補充第三旅が第十四混成旅（旅長彭壽莘）に、衞隊旅が第十五混成旅（旅長孫岳）にそれぞれ擴充された。(9)

地盤の面では直隷のほかに一九二〇年六月に吳が第三師の第五旅を洛陽に駐屯させて洛陽を根據地とする基を開いてから河南省を實質的におさえていく一方、安直戰爭勝利により安徽派の陝西督軍陳樹藩を驅逐して閻相文を、彼の死後は、安直戰爭以前より、曹・吳集團の外樣的存在となっていた馮玉祥を陝西督軍に据えた。曹・吳集團が地盤面で大きく飛躍したのは二十一年の七月から九月にかけて戰われた湘鄂戰爭によってである。これにより、蕭耀南が湖北督軍に就任し、曹・吳集團は湖北の地盤、武漢の資源及び京漢鐵道全線を掌握することになった。一九一九年春頃形成された曹・吳及び江西の陳光遠・江蘇の李純・湖北の王占元の長江三督よりなる新しい直隷派は李純の自殺、湘鄂戰爭による王占元の沒落により明確に曹・吳を中心とするようになった。

曹・吳集團の勢力擴大の根本要因となった軍事訓練の嚴格さに關しては立場の異なる者も一致して承認する所であった。北洋軍閥の惡習をさけ、きわめて嚴しい軍紀の下に連日練兵がなされ、強固で訓練のゆきとどいた組織ある軍隊が造り上げられたのである。

軍事訓練と並んで當時の吳を他の軍閥から際立たせることになった彼の政治を推進した者たちにふれておこう。吳の顧問であった岡野增次郎は吳の人材登用法として、①長年の部下で優秀な者、②先賢老練の達人、③一場の會合で意氣投合した者の三種をあげている。この內、前二者は吳集團の古い體質を溫存することになったのに對し、第三のグループは吳集團內の新派を代表し、當時の吳の政治、中國戰略を立案していた。第一次奉直戰爭後、洛陽の巡閱使署で活躍した白堅武と一九二二年北京政府內において吳を代表して活躍した高恩洪・孫丹林がそれである。

白堅武、字惺遠、又は興亞、惺亞、直隷の人。北洋法政專門學校において李大釗の同學。馮國璋、ついで李純の部下になったのち、吳の配下に入る。吳集團の新派の牙城は白を處長とする政務處であり、ここに白は俊才數十人を結集していた。その一人薛撼岳は「上海聖約翰大學在學中、血氣にはしり、陳獨秀・李大釗らに接近したため、卒業時に第二席に落され、米留學の好機を失った」という。彼は顧維鈞の推薦により政務處外交科主任となった。

高恩洪[16]は吳と同郷の山東省蓬萊の人。一九〇一年から六年間、イギリスに留學し「身を一電信技師より起し、……民國初年湖北電報局長、川藏電政監督を歷任」した。十六年以降上海電報局長に轉任し、安直戰爭に際して電報局の物資を賣却して吳を援助して、吳の知遇を得ることになった。

孫丹林[17]、字翰丞、又漢塵、漢忱。吳と同郷。胡適は孫について「この人は吳の諸葛亮である。吳氏が今日有るを得たのは大半は彼の功勞である。吳氏にはたしかに用兵の天才があるが政治においては實に子供にすぎず、まったく孫氏及び白惺亞の助けに賴っている。段祺瑞攻擊の計略、徐世昌を大總統より追う計略はともに孫氏が提出した構想だ[18]。」と一九二二年六月の日記に記している。すなわち、當時の吳の中國戰略の主な內容であった安直戰爭及び第一次奉直戰爭後の臨時約法・舊國會の回復、黎元洪の大總統への復歸の政策は孫の立案に係るというのである。

一九二二年、第一次奉直戰爭後の吳の政治は以上の三人が活發に動く中で展開された。

## 二　王寵惠內閣の成立

序でも記したように第一次奉直戰爭後、奉天派は復仇を期し、日本の援助の下、軍隊の大改造を行なっていった。直隸派としては多發する兵變、給料支拂い要求の蔓延とともに奉天派打倒のために大規模な借款を必須とし、英米にしきりに借款を要請していた[19]。だが、吳は安徽派あるいは奉天派の賣國政策を痛烈に非難してきただけに借款獲得に際して露骨な手段は取り難かった。

他方、一九二〇年十月に正式に成立した新四國銀行團について、米特使 Frederick W. Stevens は日本の親日派への借款供與に對抗して米が親英米派に借款を供與すべく、英佛を誘ってそれを設立したのだと語っている[20]。だが、そのためには列強間の利害調整のみでなく、日本に反對をとなえさせないような名義ある政府の樹立が必要となってこよう。前駐華公使 Paul S. Reinsch は二十年九月「中國の時局に對する提案[21]」の中で借款國の「政府財政の基礎が強健でなければな

らず」「憲法及び國會選擧法を制定し、中國の各部分がみな法律の基礎の上に建設されるようにしなければならない。」なぜなら、「負債國の人民代表の參與の行動を經ていないと、將來いつでも、その國の人民は正當にこの借款を否認する餘地があるからだ。」と述べている。すなわち、中國國內の借款反對を抑えるには國會の正常化、正常な政府の成立、憲法の制定が必要だとしているのである。

直隷派側の借款獲得の必要性と英米側の條件がしだいに結合して第一次奉直戰爭後の臨時約法の復活、舊國會の再開といった吳の政策が出てくる。これを當時、〝法統の回復〟といった。もともと〝法〟は憲法を、〝統〟は傳統をさしていた。民國に入っても社會狀況が一向に好轉しないことに對して保守派は〝統〟がくずれたからだとし、進步派は〝法〟が確立していないからだとした。「このように憲法と傳統との間の、また、新制度と舊文化との間はまことに解決されがたい矛盾であった。」だが、「一九一六年に臨時約法が復活し、國會が再開されたことは中國の立憲政治に一つの傳統をうちたてた。それは〝法統〟に憲法の傳統という新しい意味を與えた。」[22] この法統回復は廣東の孫文の護法政府の存立基盤を搖るがすことができるのみでなく、惡名高い安福國會により選出された徐世昌を大總統から追い、さらに連省自治の動きを抑えることもできる方策であった。それゆえ、第一次奉直戰爭後の直隷派の會議で國民會議などの說が退けられ、法統回復策が卽決されることになったのである。[23] そして、現實にこの法統回復策は一九二二年六月十六日の陳炯明の反亂の動因となったのである。[24]

こうして一九二二年六月十一日には黎元洪が大總統に返り咲き、八月十一日には舊國會が再開された。政府（內閣）方面ではこの流れに沿う主張が早くも五月十四日に出ている。すなわち、『努力週報』第二期にのった「我們的政治主張」である。この主張は高きにすぎる理想ではなく、〝好人〟が奮鬪精神を持つことが政治改革の着手手段だとし、具體策として、公開の民意を代表する南北和平會議を開催する、和議の條件として舊國會を回復し、和平會議が國會に期限通り憲法を制定させる等を上げている。この主張には蔡元培・胡適・李大釗をはじめ、王寵惠・羅文幹・湯爾和など錚々たる人

物が名をつらねている。後の三人は九月十九日に成立する王寵惠內閣の閣員でもある。

一九二二年五月の第一次奉直戰爭終結以後、同年九月に王寵惠內閣が成立するまでの外交團の動きに關して中共の蔡和森は「英米帝國主義は第一次奉直戰爭後、はじめ、吳を援助して一擧に統一させようとした。吳が奉天派に勝利した翌日、外交團は卽座に彼に借款を與えて中國を統一させることを集議した。のち、日本政府が贊成せず、また、吳佩孚に對してもまだ疑懼の點（吳はもと愛國の看板をかかげており、かつ外債を借りることを否認していた）があり、英米帝國主義者は先の方策はあまりに輕率だと悟り、そこで一意外交系に內閣をとらせることを方針とした。このような方針で現在に至り、新銀行團の回り道はようやく成功」[25]したのだと分析している。このことは當時とりわけ大きな外交課題がないにもかかわらず、吳がワシントン會議參加者による組閣を主張していた[26]ことからもわかる。かくして、吳佩孚の苦心の策とも言うべき王寵惠內閣が成立するのである。閣僚は、

總理　王寵惠　　財政　羅文幹
教育　湯爾和　　交通　高恩洪
內務　孫丹林　　陸軍　張紹曾
外交　顧維鈞　　海軍　李鼎新
農商　高凌霨　　司法　徐謙

である。この內、孫・高恩洪は吳の腹心であり、王と顧はワシントン會議中國代表であり、羅・湯とともに英米派に屬し、國內ではどの派にも屬していなかったので無黨派の〝好人〟と呼ばれた。曹錕派は高凌霨一人であった。それゆえ王寵惠內閣は〝洛派政府〟（吳派の意）〝英米派政府〟〝好人政府〟などと呼ばれた[27]。だが、この王寵惠內閣は當時進行していた直隷派の內部對立の中で倒壞するのである。

## 三　曹錕・吳佩孚集團の動態構造

法統回復に關して吳佩孚と曹錕はともに贊成であったが、その間に微妙な差異があった。曹錕は黎元洪の大總統返り咲きに不滿であった。[28] 自らが成りたかったのである。吳も曹が大總統になるのに反對であったのではない。ただ、吳は曹が徐世昌のように非法に大總統になることを願わなかった。そのため「まず憲法を制定し、ついで大總統を選出する」ことを強く主張したのである。[29] この主張の眼目はあくまでも世論を納得させ得るような形で曹錕が大總統に就任するということにあるのであって、その手順や形式にあるのではなかった。こののち、二十三年十月曹錕は惡名高い賄選により大總統に就任すると同時に〝民主的〟な〝曹錕憲法〟を發布するが、これは吳の反對を形式面のみ整えることにより封殺したものであった。吳の先の主張は曹にとり、黎元洪の返り咲きにつづいて、またもや大總統への就任が延期されることを意味した。曹と吳の對立は二十二年八月に表面化し、[30] 十月にはますますその激しさを增していった。[31]

この曹と吳の對立に曹の側につくのは彼の弟たちである。曹錳は一九一七年に第四混成旅旅長であったときから吳に服從せず、第一次奉直戰爭勃發に際しては王承斌とともに開戰に反對した。[32] 曹錕は自分の子が曹錕の後繼ぎでもあり、曹錕の私產を管理していたため通常の兄弟より親密な關係にあったが、吳には輕蔑されていた。第一次奉直戰爭後、吳が天津に行った際、直隸省の諸團體は彼に省長曹錕の更迭を請願した。果たして、六月十二日曹錕は免職になり吳を憎んだという。[33]

曹錕を繼いで直隸省長になったのは王承斌である。王は遼寧省奉天府興城の出で陸軍大學の卒業。直隸派將領の中で學歷が最高で教育水準が高いのみでなく、戰略にも通じており、その學識・戰功は吳に匹敵した。[34] そのため曹錕嫡系の中でその〝資望〟（經歷と信望）は吳に次いだ。[35] 二十四年に王承斌にかわって第二十三師師長になった王維城の回憶によろう。[36] 王承斌は旗人で原名は承斌のみ、宗社黨に參加した。吳が曹に王は宗社黨なので用いないよう提案して以來、王は吳にわ

だかまりを持ったという。維城は彼と保定軍官學校の同級で安直戰爭後、彼の第二十三師の第四十五旅旅長となる。第一次奉直戰爭が始まると維城は第四十五旅の六營の內、二營を率い中路を擔當し、巧みな戰術で奉天軍を破った。同旅の二營は承斌が永定河方面へ移動させ殘り二營は第三師を支援した。奉天軍が崩壞しかけたとき、維城は代理總司令となっていた承斌に四度も電報で追擊命令を出すよう要請したが彼は握りつぶした。これを吳はのちにはじめて知ったという。承斌は鄉土觀念が強かったのである。彼は本來直隸督軍になりたがっていたが曹錕が手放さなかったので曹銳を繼いで直隸省長になった。この時、吳は彼に維城の戰功に報いるため第二十三師を手放すよう言ったが、彼は讓らなかった。彼は吳が兵權を奪おうとしたことに對し曹錕に取り入って對抗したという。[37] 彼は直隸督軍、さらには直魯豫巡閱使になることを考えていたが、曹錕がその地位に居る以上無理であった。そのため彼は曹を大總統にのぼらせるのに盡力したのだという。

かくして、曹錕（保定）と王承斌（天津）はその利害が一致してきた。吳佩孚の洛陽派に對する津保派の形成である。津保派と洛陽派の對立に今一つ、吳佩孚と馮玉祥の對立がからみあってくる。眼を河南に轉じよう。

『晨報』一九二二年八月三十日の「豫省代表來京請願裁兵」に當時河南に駐屯していた軍隊及び軍費の一覽表が記載されている。

表1　一九二二年の河南省駐屯軍隊表

| 名稱及び長官 | 每月軍費 | 沿革 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 陝西陸軍第一師<br>師長　胡景翼 | 餉幣<br>四萬元 | 陝西より直隸派支援のため河南直隸閭に駐屯。 | |
| 陸軍第八混成旅<br>旅長　靳雲鶚 | 餉幣<br>四・五萬元 | 現在第十四師に改むるも各省で裁兵の議論が盛んなので未だ明文を發布していない。 | 奉直戰爭の際、擅いままに知事を任命し、地方からしぼりとった金、計り知れず。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第十一師<br>師長　馮　玉　祥 | 十四萬元 | 馮が陝西より河南につれてきた。 | 按ずるに第十一師は中央の軍隊であり、河南省が軍費を支給すべきではない。 |
| 新編河南遊撃陸軍衛軍<br>計六團 | 九萬元 | 馮が新たに募集。 | |
| 暫編河南陸軍第一師<br>師長　常　德　盛 | 十四萬元 | 毅軍より改編。わずかに銃三千丁のみ。現在、江西へ出動。 | 吳佩孚、一師扱いの軍費支給を承認。 |
| 馬　燦　林<br>一混成旅 | 七萬元 | 該旅、かつて吳使にしたがい直隷派を援助、實數千人未滿。 | 吳使、一混成旅扱い。 |
| 林　鑫<br>一混成旅 | 七萬元 | 該旅はかつて湘鄂戰爭に參加、實數千人前後。 | 同　右 |
| 馬志敏<br>二混成旅 | 七萬元 | 舊毅軍二營のみ。 | 同　右 |
| 李治雲<br>一混成旅 | 七萬元 | 奉天派先鋒隊より改編。 | 同　右 |
| 田維勤<br>一　旅 | 幫餉<br>二萬元 | 陝軍、馮が移動させる。 | 河南陸軍に改めたという說あり。 |
| 曹世英<br>一　旅 | 幫餉<br>二萬元 | 陝西、直隷派援助のため河南に留まる。 | |
| 丁香玲<br>一混成團 | 二萬元 | 毅軍より改編して補充と爲す。 | 吳使、一混成團扱いを承認。 |
| 清鄉隊<br>一　團 | 一・五萬元 | 袁步黃の部隊を改編。 | |
| 合　計 | 八二萬元（ママ）<br>（八一萬元――引用者） | | |

この表に含まれていないもので二十二年八月段階で河南に駐屯していた軍隊に洛陽の吳佩孚の第三師、及び鄭州の張福來の第二十四師がある。ともに中央軍で河南省財政からの軍費支給對象ではないので表には出てこない。まず、これらの軍隊の軍紀・戰鬪能力別にグループ分けすることにより、當時の河南における軍事情況をよりリアルに把握していきたい。

ほぼ毎年なされた陸軍省『密大日記』所收の「北支那軍事調査報告」の內、當該時期に最も近いのは一九二三年五月末調べのものであるが、その各軍の戰鬪力に對する評價は二十二年段階のそれを想定するに足るものである。まず、馮玉祥の軍隊をとり上げよう。該調査の〝教育訓練〟の項では、馮軍の將校について、

上級將校ノ教育ニハ陸軍大學出身ノ教官ヲ用ヒ圖上及現地ニ於テ新戰術ヲ教育シ且輜重兵站勤務ヲ教育ス將校ニハ基督教的精神教育ヲ施シツツアリ

下級將校ハ卒伍出身者多ク學力低シ然レトモ體力強ク且馮ノ壓制ニ盲從ス要スルニ將校教育ハ逐次進歩シツツアリテ支那軍將校中能力優秀ノ者多シ

と述べ、きわめて高い評價を下し、下士卒については、

軍紀尤モ嚴肅ニシテ人民ノ風評良シ一般將校以下粗食ニシテ行軍力大ナリ日々嚴格ナル訓練ヲ行フ木工具毛布罐詰等ノ製造ヲ下士卒ニ教育シ自給自足ノ途ヲ講シ又軍用自動車操縱ヲモ練習シアリ

と記し、日本軍ニ對スル能力上ノ差異判斷の項では、

教育訓練以上ノ如クニシテ支那軍中出色ノ點アリ　故ニ能力ハ左ノ如シ　½

としている。日本軍に對する戰鬪能力が二分の一とあるのは一見低い評價と考えられるが實はそうではなく、この詳細極まる調査において北中國の全中國軍の中で最も高い評價なのである。

次に嚴しい軍事訓練を行なっていた吳佩孚の第三師について、將校の項には、

日本士官學校出身ノ將校少數アリ下士卒ノ教育ハ密集教練ニ重キヲ置キヲレリ

と記し、日本軍ニ對スル能力上ノ差異判斷の項では、

大體ニ於テ河南軍ニ比シ優秀ニシテ對日軍ノ能力左ノ如シ

とあるが殘念ながら數値は記入漏れである。そして摘要の項には、

教練ニ□□スルモ其ノ方法舊式ナリ一般ニ元氣旺盛將校以下兵器ノ取扱方法ノ了解充分ナラス

と記し、明らかに馮玉祥軍に對する評價より低い。

また、河南軍の日本兵ニ對スル能力判斷の項に、

¼—⅙ 軍隊トシテノ教育ハ頗ル不完全ニシテ加フルニ傭兵ノ爲戰時其ノ程度更ニ低下シ年齡ノ差著シク我軍隊ノ一ニ對シテ彼ノ四乃至（五——引用者補充）ヲ以テスルヲ要スヘシ

とある。これより見ると吳軍の日本軍に對する評價はほぼ三分の一程度であったろうと考えられよう。

先の『晨報』の一覽表のあとに「馬燦林・馬志敏・李治雲・丁香玲の四人は趙倜の舊將であり、聲望は胡景翼・靳雲鶚・王爲蔚・岳維峻らの客軍の下にある」とあり、また、『順天時報』には「馮玉祥・張福來・靳雲鶚及び吳佩孚の軍隊は紀律がまだよい、……ほかの胡景翼・常德勝・馬燦林らの率いる軍隊或いは客軍は軍紀が嚴格でない」[38]とある。以上の材料を總合して當該時期、河南省に駐屯していた軍隊を軍紀・戰鬪能力のランクで分けると最良が馮玉祥軍、ついで吳佩孚・張福來・靳雲鶚の軍、第三が胡景翼の陝軍、最惡が馬燦林らの舊河南軍ということになろう。

これらの河南駐屯軍の閒で「馮玉祥は軍費問題で新任の第十四師師長靳雲鶚・陝軍第一師師長胡景翼と不和で、河南では張福來（馮の後の河南督軍——引用者）・靳・胡が三角同盟を組織し馮打倒を畫策しているとのうわさが廣まっていた。」[39]という。『晨報』一九二二年十月二十一日「各方盛傳馮玉祥他調之內幕」の中には反馮三角同盟の形成過程が詳しく記されている。

馮氏が河南督軍になったばかりの頃、靳雲鶚は省長を、胡景翼は軍務會辦をねらっていた。……鄭州の戰鬪で馮氏と同様に力を出したので分け前にあずかろうと考えたのであり、大部隊を擁しているのに地盤がなく軍費のあてもないのはあるいは豫想外のことであったのだろう。ただ、當時ついにその欲望を達成できなかったので兩人は馮を猜疑した。

と、第一次奉直戰爭の論功行賞に對する靳・胡の不滿を記している。當時、中央からの地方への財政援助が急激に減少し、たとい中央の正規軍であっても地方で自らの軍費を調達せざるを得なくなっていたのであり、馮玉祥軍の軍費もまったく河南省の收入に依存していた。この意味では靳の軍も中央軍であり、馮軍と同じ立場に立ち得たはずである。また、胡景翼の陝軍は河南軍とされていない以上原則的に陝西省の收入から、その主な軍費をまかなうべきであるが、當時、そのようなことは望み得べくもなかったのである。

ついで同記事は、

河南の人々は軍事費の增加があまりに大きく、每月の軍費が八十六萬元餘りに增加したので各地に奔走呼號して負擔輕減を請願した。その結果、吳は親筆で每月五十四萬元に減らすとした。これは前督軍趙倜時代よりわずかに二萬元少ないだけであった。

と、河南省における軍事費負擔の急激な增大とそれに反發を強めて民衆が請願運動を展開している模樣を傳えている。これによると趙倜の時期には每月の軍費が五十六萬元、年閒六七二萬元、先の一覽表の見られる八月段階ではそれが八十一萬元に、十月にはさらに增大して八十六萬元、年當り一〇三二萬元になっている。『國民軍史稿』によると當時の河南省の歲入は約一一〇〇餘萬元で實收入は九〇〇萬元にすぎなかったというから(40)、單に軍事費のみで全收入を上回ることになるというすさまじい狀況にあったことがわかる。

この請願運動の結果、

靳・胡の各軍は毎月河南省が補助する費用（各四・五萬元）がすでに半ばを削られたので大いに不満であった。彼らは河南の人々の呼號は馮があやつっている。そうでないのなら、なぜそれに干渉を加えないのかと考えた。彼らは馮に報いる方法をひそかに謀ったが、自分たちの力が弱くて馮に對抗するに足りないと考え、第二十四師師長張福來氏と誼みを結び、馮を排除し張を推戴したいといった。……かくして小さな三角同盟が成立した。

と、張福來・靳雲鶚・胡景翼の三人による反馮玉祥の三角同盟の形成を記している。

胡・靳軍が軍費削減に向かわされていたとき、馮軍はいかなる狀況にあったのであろう。まず、馮は自らの兵士に給料を遲配した分を含めて一氣に拂っている。「河南についてから二箇月内に連續して五箇月分の給料を拂った。第十六混成旅から第十一師に改編されたとき、軍費・武器を增加しないという制限條項があり、そのため不足額も多かったが、この時、補充が完成した。」[41]という。その上、この時期馮は補充團五箇、每團二千人を編制し、衞隊團を學兵團に改編した。[42]一師が約一萬人とすると、馮軍は第十一師の兵士の給料を完濟し、武器の補充を完成し、さらに補充團と學兵團一萬餘人を增やし、兵力は二倍強に急擴大したことがわかる。しかも、これは戰時における敵の投降ではなく平時においてなされている。また、時の陸軍總長張紹曾の弟で吳のもとで軍事參贊になっていた張紹程の回憶[43]によると、馮は兵工廠からの兵器の補充購入に關する吳の手諫を紹程を通して得たが、その命令の上には武器の種類と數量が記入されていなかったのでいくら購入してもいけないということはなかったという。こうして「兵工廠からきわめて充足した三箇旅でも使い切れない銃彈を購入した」のである。

以上の考察より、第一次奉直戰爭後、河南督軍に就任した馮玉祥は排他的に自軍の擴充をはかり、華北における（そして、おそらくは全中國における）最精銳部隊を作り上げたのであり、このことがまた胡景翼・靳雲鶚・張福來の反馮三角同盟の形成にもつながっていったことがわかる。吳が馮に一時に八十萬元、以後、每月二十萬元を上納せよと要求したのに對し、馮は拒否していた。[44]こうして、吳と馮の對立に反馮三角同盟の形成が加わり、河南省における軍事的緊張が急激に高

まってくる。もはや、馮の河南退出は時間の問題となった。

このののち、馮玉祥は陸軍檢閲使として北京に移駐することになる。それに關して、馮は「吳が中央に馮を陸軍檢閲使に移すように提案したと人から聞いた。」[45]「はたして吳佩孚が保定派の閣員高恩洪に示唆し、黎元洪に提案し、強迫下で中央が私を陸軍檢閲使に轉任させる命令が二十二年十月三十一日頒布された。」[46]という。すなわち、馮が河南督軍の地位を追われ、北京の陸軍檢閲使という何の地盤もない役職に轉任させられたのは吳佩孚の策動であるというのである。

これに對して吳の參謀白堅武は「吳、馮をして閩を援けしめんと意うも、而れども曹、入れて京師を拱せしむ。檢閲使の令下り、一師三混成旅の編制、忽卒として卽ちこれが爲めに成立す。」[47]と記し、吳は馮を福建方面の軍事に使おうとしたが、曹錕がそれに反對して北京防衛の陸軍檢閲使の職に就かせたと述べ、先の馮の回憶とまったく相反する證言を行なっている。

ともに回憶錄であるが、白の方のものが當該時期に近く、したがって、事實がゆがめられていない可能性が高いといえなくもないが彼の回憶は一九二四年の北京政變ののちに書かれており、直隷派敗北の原因を二年前に溯及させている可能性があり、すぐには信用することはできない。

だが、『晨報』一九二二年十月二十一日の「各方盛傳馮玉祥他調之內幕」に、

> 吳（馮の誤り——引用者）が洛陽で吳に會ったとき、吳はかつて安徽督軍と熱河察哈爾綏遠巡閲使の二つのポストの內、一つを馮に自ら選ぶに任せた。馮は安徽であろうと熱河察哈爾綏遠であろうといつに中央の命令に從うと答えた。馮は開封に歸り、このことを腹心に告げると部將たちはみな、馮の安徽轉任はあるいはがまんして命令を受けることもできるが、熱河察哈爾綏遠に赴くなどまっぴら御免であるとして憤激した。

とある。この情報は馮の河南退出に反對する世論工作、あるいは壓力の役割を客觀的に果たすものであり、馮にとってこの情報をもらすことに利益があっても、吳の側には何らのメリットもなく、デメリットのみである。つまり、この記事の

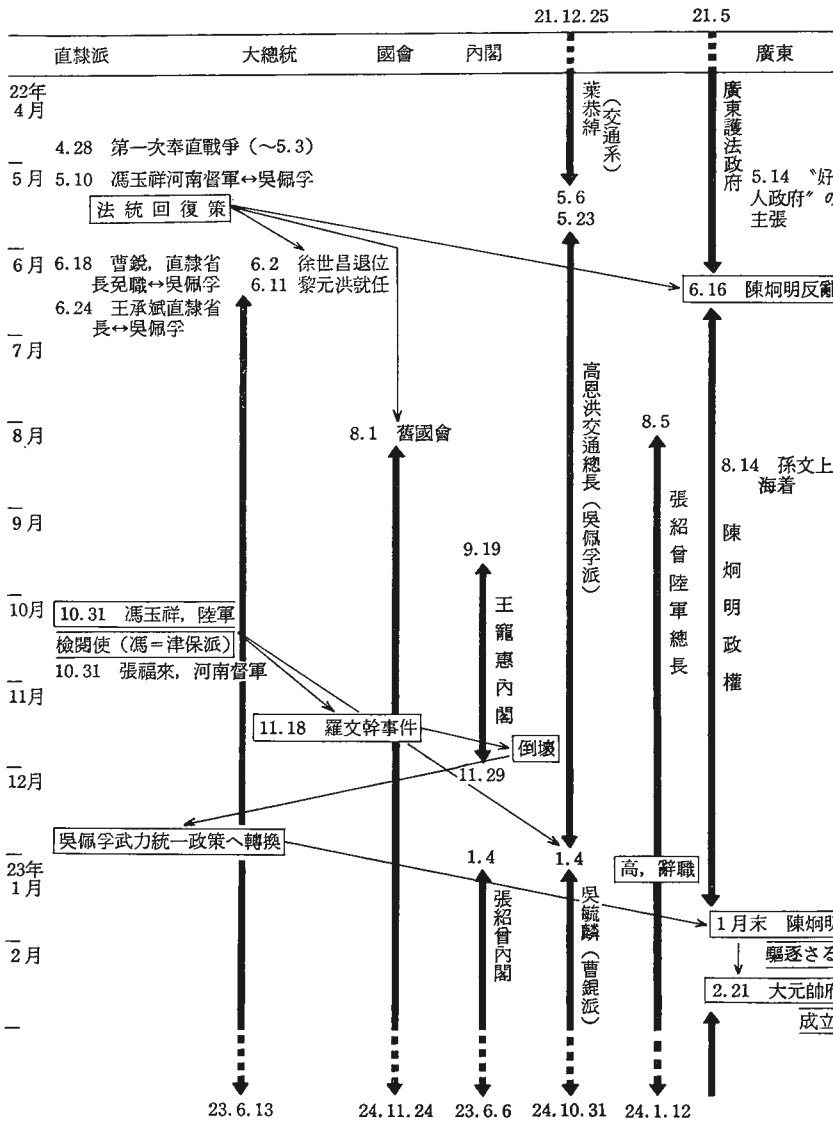
情報源は素直に馮軍の側であると考えていいことになる。しかも、當時、安徽派の徐樹錚が福建で政變を起し、それに安徽督軍の張文生が呼應した動きを示していたのであり[48]、白堅武のいう〝援閩〟と『晨報』記事の〝安徽督軍〟とは密接に關連しているのである。すなわち、馮玉祥サイドが當該時期に語っていた內容が相對立する立場にいた白堅武の證言とまったく一致しているのである。以上の考察より、我々はもはや白堅武の回憶を事實をねじ曲げたものとすることはできず、逆に、馮玉祥の回憶こそが事實を歪曲していると斷言し得る位置に立ち得た。

では、なぜ馮はこのような虛僞を書いたのか。それは我々がもはや正しいとせざるを得ない白の回憶の內容の內、馮の回憶が意圖的に記述せず抹消しようとしている部分に注目することにより明らかになるだろう。すなわち、陸軍檢閱使への轉任は曹錕によるものであるということ、しかも、それを馮は隱蔽しようとしていることの二點である。このことから、我々は當然のことながら馮と曹の間で何らかの取り引きが存在したのではないかと考えざるを得ないのである。なぜなら、吳が馮に提示した安徽督軍あるいは熱河察哈爾綏遠巡閱使はまがりなりにも地盤があるのに對し、陸軍檢閱使はまったくの名目的職にすぎないのであり、曹錕がより不利な地位に轉任させたのである以上、大なる非難があってしかるべきだからである。馮・曹間の取り引きは地盤に代わり得るようなものでなければならぬ。

馮玉祥は陸軍檢閱使に轉任した頃のことをふり返って「その時の國務總理・陸軍部長は張敬輿先生（張紹曾——引用者）で……私のために盡力して援助してくれた。まず、私の部隊を一師三箇混成旅に改編した。第七混成旅、旅長張之江、第八混成旅、旅長李鳴鐘、第二十五混成旅、旅長宋哲元である。……部隊の名義がそなわったので軍費は手だてがあった。」[49]と記している。これによると五補充團、學兵隊計一萬餘は數的には三箇混成旅と變わらないが、改編を受け正規の軍隊として登錄されてはじめて軍費支給の對象となり得ることがわかる。そして、馮はこの改編が張紹曾の盡力により、張が國務總理の時になされたというのである。

周知のように（圖1參照）第一次奉直戰爭後、一九二二年十一月二十九日に王寵惠內閣が倒壞するまでは吳佩孚系內閣で

**圖 1　1922年の情勢**（22年4月～23年2月）



あり、翌二十三年一月四日には明確な曹錕系張紹曾内閣が成立する。また、張は二十二年八月五日から二十四年一月十二日まで陸軍總長である。だから、馮によると馮軍の改編は陸軍檢閲使へ轉任となった二十二年十月三十一日より少なくとも二箇月以上ものちのことになる。

これに對して、先の白堅武の回憶は馮の回憶と次の二點で對照的である。第一に馮軍の改編には張紹曾の力があったとしても決定的なのは曹錕の存在であること、第二に改編は陸軍檢閲使への轉任令とほぼ同時に突然出されている、つまり、内閣の系統でいうなら曹錕系ではなく吳佩孚系の内閣のときになされたとしていること、の二點である。

いずれが眞實なのか。再び、張紹程の回憶を檢討することにしたい。彼は馮が改編にあたって力のあったとする張紹曾に最も近い存在だからである。彼は馮軍の擴充を記したのち、

馮にはもし吳に請求すれば、この三箇混成旅の募集について事前に彼の許可を得ていないのでけっして批准されないことがわかっていた。……北京の陸軍部の張紹曾の所に行って方法を講ずるのがいいと考え、張紹曾の學生であった張之江を派遣して紹曾に改編正規軍化を批准するよう求めさせた。

と、對立する吳佩孚を避け、張紹曾に頼みこむことにした經緯を記す。これに對して、

紹曾は非常に對應に窮し、張之江にむかって「この事柄は閣議に提出しなければならず、もし、提出すれば、高凌霨（内務總長）吳毓麟（交通總長）張英華（財政總長）らはみな直隷派で吳佩孚の鼻息をうかがう者たちであり、吳の同意がないのに彼らはよく通過させるだろうか。君は歸って馮にこの事はやり様がないと返事してくれ。」

と言ったと記している。

だが、馮は張之江についで同じく紹曾の學生であった張樹聲を派遣し執拗に請求していった。ついに

紹曾はねばりに負けて「私が總長のポストを犧牲にして陸軍部の命令でこの三箇混成旅の番號を批准しよう。」と言い、……數日たたずに果たして紹曾は部令でこの三箇混成旅の番號を發表した。

と記す。これに對し、吳佩孚は、

> 非常に不滿だったが、しばらくは紹曾に對處する方法がなかった。だが、馮が三旅の軍隊を擴充したことに對してはさらに忌み憎み、馮は河南で勢力がますます大きくなり、ついに心腹の患になったと考え……吳は北京政府に馮を河南から引き離すことを提議した。

という。

當該時期の『政府公報』の陸軍部令の項にはこの三箇混成旅改編の記載は見い出せない。管見の限り、陸軍部令では陸軍部所管の機構の人事が大部分を占めており、陸軍部令でこのような改編命令が出された例は見あたらない。實際、この改編の正式な命令は約一年も後の一九二三年十月四日の大總統令で出ているのであり、この改編がいかに強引に例外的な形でなされたかがわかるのである。

先の張紹程の回憶を要約するなら、馮軍の改編正規軍化は吳佩孚系內閣の時點で強引になされた、ということになろう。『國民軍史稿』にも「馮は十月三十一日隨員及び拳銃隊などを率いて北上した。惟だ以前に招募した補充團及び學兵團はすでに中央に呈文を送り三混成旅に改編されていた。」(50)（傍線は引用者による）とあり、吳系內閣の時點になされたことが確認し得る。馮と吳は當時鋭い對立關係にあり、張紹曾にも吳の意向に反する馮軍の改編正規軍化を內閣に提議しても絶對に通り得ないことは明白だったのである。そして、先の張の言は逆に彼にはそれをやるだけの力量がないということをも示しているのである。張之江や張樹聲が派遣されてねばり勝ちで說き伏せたとするが、それだけではあまりに無理があろう。ここには張より大きい勢力、吳に匹敵する力がこの馮軍の改編正規軍化に贊成したと考えるほかないであろう。そして、その力とは曹錕を措いて考えられないのである。このことは馮サイドの記述によっても確認し得る。『國民軍史稿』に、

> 吳は高恩洪に黎元洪に會って馮玉祥を免職するようにせまらせ、また、保定の曹錕に電報で、この機會に馮軍を消し

てしまおうと告げた。……曹錕は性格が溫厚であまりひどいことをしない。かつ、その左右の者たちが、洛陽の吳佩孚は勢力が大きく制御できないでいる、馮の軍事力を溫存してその權力を分けた方がいいといった。そして、馮はついに南苑に駐屯することができた。(51)

とある。傍線部の原文は「洛吳勢大。且不能制。不若留馮軍力。以分其權。」であり、この〝留〟は文脈から明らかに〝河南に留める〟という keep sb. where he is の意ではなく、reserve の意である。

以上の考察より、我々はまたもや馮の回憶ではなく、白の回憶を眞とせざるを得ないのである。まことに馮玉祥の第十一師の參謀長劉驥(52)の語るように「今回の馮の轉任は河南の地盤を失ったけれども、部隊は擴大とその正規軍化ができ軍費も比較的見込みがついた。(53)」のである。

吳は馮が北京に行く際、率いて行くのを許したのは第十一師のみであり、第十一師には河南省から毎月二十萬元を支給するが、先の三混成旅は河南にとどめておき、吳が人員を派遣し訓練をつづけ指揮させる、という要求をつきつけたが、馮は巧みに且つ迅速に全軍を北京に移動させ、吳の要求、目論見を打破した。馮は吳が二十萬元を送るという約束を反故にしたといって非難しているが當らないであろう。陸軍檢閲使時代、馮の軍費は崇文門の關稅から五萬元、京綏鐵路局から十萬元、財政部の鹽餘などの項から十萬餘元が支給され、(54)武器の補充は曹錕から銃三千丁、大砲十八門、彈丸數百萬發が支給された。(55)このののちも馮玉祥軍は擴大をつづけ、二十四年十月の第二次奉直戰爭直前には三萬五千になっている。(56)

第一次奉直戰爭後、一貫して吳佩孚系であった內閣に對して津保派は馮軍の北京移駐直後、一擧に攻勢に出て洛陽派內閣を倒す。眼を轉じて王寵惠內閣の倒壞過程をみてみよう。『晨報』一九二二年十一月十九日、「吳佩孚最近之態度　洛陽特約通訊員愚公　十一月十六日」の中で吳のスポークスマンは、

吳は王內閣を終始擁護している。王がしばしば辭職願いを出すのは國會が難癖をつけたためであって保定方面の不滿が原因なのではない。曹は國事に對して今まで單獨行動がなかったのだ。……曹の人となりはきわめて忠實誠實であ

り、吳とはとりわけうまくいっている。吳が王を擁護している以上、曹はおのずから異をとなえない。だが、曹の左右の者が中央地方の要職をねらい內閣を倒そうとしている。

と述べ、曹の周圍の者に對する警告を明らかにしている。この談話から、曹錕はこれまで一度として表立って吳に反對の意を表明したことがないことがわかる。そして、それは逆に曹が吳に對する反對を表立って表明する際は自らの主張を貫徹するに足る萬全の態勢をもって臨むであろうことをも示唆しているといえよう。

この談話がなされた二日後の十一月十八日國會內における津保派の代表衆議院議長吳景濂・副議長張伯烈らが王內閣の財政總長羅文幹の汚職事件をでっち上げ、ために羅は大總統命令で違法逮捕される。この事件がいかに強引であったかは『晨報』一九二二年十一月二十五日「羅案紀載(六)」に、羅文幹事件では種々解明しなければならない點があるが「大總統(黎元洪)及び吳(景濂)張(伯烈)の違法は最も明確で斷定しやすい」とあることからも明らかである。

同記事によると十一月二十三日、吳景濂は黎元洪に面會した際、

保定ではすでに(1)吳佩孚を叱責する電報(2)もし、吳佩孚が命にしたがわねば討伐を行うという電報の二つを用意している。

と語り原稿を見せたという。

既述の如く、津保派は王承斌の第二十三師の中に吳佩孚に近い第四十五旅旅長王維城を含んでおり、他に北京近郊には曹錕の第二十六師のみであった。そして、これだけの軍事力をもってしては吳の軍事力を背景とした北京の政治をくつがえすことは從來不可能だったのである。したがって、この『晨報』記事に見られる、吳佩孚に對する武力行使も辭さないという吳景濂、曹錕のきわめて強硬な對應の背後には北京政治を直接左右するような自派に屬する軍事力が增大し、少なくとも吳佩孚のそれに對抗し得るようになったという情況判斷がなければならない。そして、この軍事力とは馮玉祥軍を措いてないのである。

十一月二十三日にはいよいよ曹錕自らが羅文幹攻撃の通電を發し、翌二十四日、王承斌らもそれに附和する通電を打ち、ついに二十五日吳佩孚は曹に服從することを表明した。かくして自らの後ろ楯を失った王寵惠內閣は倒壞するのである。

もはや明白である。河南省において吳佩孚と對立していた馮玉祥の陸軍檢閱使への轉任、馮軍の改編正規軍化及び全軍の北京への移駐、その直後の羅文幹事件のでっち上げによる王寵惠內閣の倒壞は文字通り津保派による馮玉祥軍を抱き込んだ軍事クーデタだったのである。

もともと全く別系統の對立であった曹・吳の對立と馮・吳の對立は馮の陸軍檢閱使への轉任、その見返りとしての馮玉祥軍の改編正規軍化によって一つにからみ合わされたのである。そして、この取引きが空手形に終わらないことを保證するためには陸軍檢閱使への轉任と同時か、できれば、それ以前に、吳佩孚系內閣の時點で正規軍化を強行する必要が津保派にはあったのである。先に見た馮軍の改編正規軍化の異常さは正にこのことを示しているのであって、曹錕系內閣の時點でなされたのであれば、その意味の半ば以上を失うものであった。

Odoric Y. K. Woo は「馮の勢力擴大を恐れた吳は二十二年十月三十一日馮を陸軍檢閱使に轉屬させた。」「一時期、馮は津保派に運を見い出した。曹錕とその周圍の者も洛陽派に對する鬪爭における自らの位置を強化するであろう軍事力をもったこの新しいメンバーをもろ手を上げて歡迎した。」「二十二年十一月までに馮は曹錕派と見なされ、津保派に馮が屬していることは二十三年一月の組閣における津保派と洛陽派間の鬪爭の結果を決定する上に重要な要因となった。」[57]とする。すなわち、吳が馮を陸軍檢閱使に轉任させたことは結果的に津保派の洛陽派に對する勝利、曹錕系張紹曾內閣の成立につながった、というのである。だが、我々はこれまでの考察により、吳ではなく曹錕が馮を陸軍檢閱使に轉任させたのであり、結果的にではなく主動的、周到な準備策動により洛陽に對する津保派の北京政治における勝利があったのであり、それは曹錕系張紹曾內閣の成立ではなく、吳佩孚系王寵惠內閣の倒壞につながったと斷言し得るのである。

この軍事クーデタに關して Woo のみでなく同時代の研究も、のちの軍閥研究もすべて評價を誤まっている。[58] 唯一、James E. Sheridan が當時吳のために新聞紙上で宣傳していた Rodney Y. Gilbert の「曹の支持者たちが馮の移駐を遂げた。吳は特に馮が去ることを望まなかったが、馮が行きたがったと考えたのである。」という言を註に引き、馮の移駐が曹派の策動である可能性を臆測しているのみである。[59] 本章は新聞・雜誌・檔案・回憶・日本の軍事情報文書を比較對照分析することを通して、このクーデタの實在を檢證したものである。

## 四　王寵惠內閣倒壞の意味するもの

王寵惠內閣打倒の動きは孫丹林・高恩洪を國會が約法で定められた權限を行使して否定したことに始まる。[60] したがって、羅文幹事件を契機とする倒閣策動は明確に政府內の吳佩孚勢力の排除を目論んでいたということができる。宗方小太郎もいうごとく「要するに內閣問題の焦點は交通・財政兩部の爭奪戰にして、各々之を自黨の掌中に占握して金融の便を計らんと欲するにすぎず、……昨今の情勢にては此の兩總長は曹錕系より出るに至るべく、吳佩孚はその盛時に配置せし高恩洪・孫丹林以下の總長盡く政局より排斥せらるるの悲運に逢着」[61] したのである。その後に成立することになる張紹曾內閣の閣員に關し、曹錕が交通、財政の兩部とともに內務部の人事においても讓歩しなかった背景には先の內務總長孫丹林の存在を抜きにしては考えられないであろう。張內閣はこの交通の吳毓麟・財政の劉恩源・內務の高凌霨の三人の保定派閣員を中心とする內閣であった。[62]

內閣が吳佩孚系から曹錕系になったことは直接に吳の財政にはねかえってくる問題であった。直隷派が政權を握っていたとき、結局は大きな借款は無かったのであり、それゆえ、つぎのややのちの史料を使うことによっても一九二二年末の吳の財政狀況を大枠の範圍ではあるが知ることができよう。「洛陽巡閱使署の經常費としては年額僅に二萬四千兩を計上するにすぎず。支出の重なるものは何と言っても養兵費なり。現に洛陽直系の軍隊は五師、此他非正規師二師。正規軍の

經費は月十四萬元を定額とし、不正規軍には四萬兩を補助とし、その他は各統制官をして自給自足させる。斯くて月額七十八萬兩は本巡閲使に於て籌款せざるべからず。これ國軍の名ありて國費の支辨なし。變態なる財政規畫の下に在るを以て、右は主として京漢線南段（黃河以南）の鐵道收入を以て充當している。現在まで六年閒で變通的籌款にて軍費を支持せし總額は六八〇萬兩に達す。」[63]という。

このように鐵道收入と軍費との閒には重大な關係があった。今少し詳しく見てみよう。[64]まず、各地の軍閥の所在の鐵道からの徵收がある。二十年吳が京漢鐵道南段に監收處を設けてより各地の軍閥がそれにならったのである。趙倜は河南督軍のとき、吳に京漢鐵道の河南省內における運賃を與えている。曹錕も河北省內の京漢線收入を軍費にした。湖北督軍に蕭耀南が就任すると彼は湖北省の京漢線の全收入を吳に送り、こののち、吳は河南省內の黃河以北の京漢線收入を曹に讓る。こうして、二十二年から二十四年にかけて京漢鐵道の收入は北段が曹に、南段が吳にはいることになった。[65]曹錕は北段收入一三〇萬元の內八十萬元を軍費に得ている。[66]これが「監收」である。

つぎに「協餉」がある。吳は京漢線のほかにも隴海線、[67]津浦線[68]からも金を受けとっている。

そして交通部。交通部收入には鐵道のほかに郵便・電報の收入があるが、鐵道收入が大部分をしめていた。たとえば、十九年交通部の全收入三五〇〇餘萬元中、前二者は計三〇〇餘萬元のみであり、三二〇〇萬元が鐵道收入であった。袁世凱が鐵道收入からとり上げたのに倣って彼の後繼者たちは政務の費用のほとんどすべてを交通部の負擔とした。一九二〇年における交通部收入計一七七〇萬元は財政部に五〇〇萬元、他の部局に一〇三萬元を支給し、殘った一一六七萬元の內、督辦邊防處[69]に五〇〇萬元、西北籌邊使[70]に二一〇萬元、陸軍部に一五〇萬元、定國軍司令部に二二萬元、安徽派の督軍政客に約二三〇萬元、計一一一二萬元が分配された（これには安直戰爭後のことは含まれていない）。つまり、當時政權を握っていた安徽派にほぼ獨占されていたことになる。二十二年十一月のこととして、それ以前の半年閒で交通部から吳佩孚に五〇九・九萬元、曹錕に二四二・四萬元が支給されている。しかも、これは財政部を通して支給されたもののみであり、

交通部から直接支給された額は不明であるという。[71] この半年閒は高恩洪の交通總長在任期閒であり、高が吳に曹錕に倍する金額を優先的に支給していたことがわかる。以上が「提款」である。この高に對し、曹錕は不明瞭な罪で檢擧させ、[72] 交通總長の座から追う。したがって、曹錕系內閣の成立は先の吳佩孚優先の交通部よりの支給を逆轉させることを意味していた。

當時、北京政府の財政は極限狀態にあった。借款が獲得できないため、軍餉が支給できず、全國各地で兵變が多發し、二十二年七月・八月だけでも保定・熱河等で兵變が起り、北京にも波及した。[73] 二十一年から二十二年には外國からの借款も少なくなり、給料未拂いは重大な社會問題となり、[74] 兵變のみでなく北京政府各部の職員も給料支拂いを要求してくる。このため、二十二年七月には交通總長高恩洪が京奉・京漢・京綏・津浦の四鐵道を擔保として三億元の統一大借款を提議したが、四國借款團は顧慮する所があって應じなかったという。[75] したがって、九月に成立した王寵惠內閣にとり當面の最大の緊急課題は借款獲得であった。

だが、『密大日記』に「京漢京綏兩鐵道收入竝兩鐵道ノ株券ヲ擔保トセル六千萬元借款ハ等シク英國ニ於テ之ニ應センストスルモノノ如ク高恩洪一派ハ該資金ヲ以テ新ニ交通銀行ヲ設立シ永久的ニ吳佩孚ノ軍資金調達所タラシメントスルノ計畫ナリト稱セラル而シテ本借款談モ相當進捗シアリシハ事實ナルモ王寵惠內閣既ニ倒レ高恩洪ノ地位亦タ永續ヲ期シ難キ現況ニ於テハ最早ヤ成立ノ望ヲ失ヒ其實現ハ期待シ得ラレサルニ似タリ」[76] とあるように英米とそれに應じた吳の方針で成立した王寵惠內閣の倒壞は借款獲得の望みを大幅に減退させることを意味していたのである。

既述の如く、法統回復及び王寵惠好人政府の方針は關內の統一策だったのであり、その完成を期すべく、吳佩孚側は陳炯明反亂後、二十二年八月に上海に移った孫文に對しても吸收工作を展開していった。[77] だが、孫文の側では九月の張學良への手紙の中で「文、頃ろ書を尊公に致し、此の後の軍事進行、仍お宜しく西南より發難し、險に據りて敵と相持し、彼をして進まんと欲するも得ず、退かんと欲するも得ざらしめ、然る後、尊公、大兵を以て直ちに北京を搗き、津・保を略

定し、以てその巣穴を覆し、その歸路を絶たば、敵必ず滅ぶべきを述ぶ。」[78]とあるように早くも九月には奉天派・安徽派との反直三角軍事同盟締結のため、十七日には胡漢民・汪兆銘が杭州において安徽派の盧永祥との協定を終え、二十二日には今度は汪兆銘が奉天に赴いており[79]、呉・孫閒の交渉がきわめて抽象的で單なる政治的應對のレヴェルを越えていないのに對し、孫・盧・張閒の交渉は具體性においてはるかに優っていたといえるであろう。王内閣の倒壞はもともと餘り可能性の高くない孫文吸收工作を決定的に望みうすにした。

和平統一策から武力統一策への轉換に關して、胡繩は「一九二三年の「二・七」虐殺事件は、呉佩孚の軍隊が直接手を下して京漢鐵道の勞働者を虐殺したもので、彼の凶惡な姿が徹底的に暴露された事件であった。同年三月、呉佩孚は洛陽で軍事會議を開き、「武力統一」の旗を高々とかかげた。洛陽の策動と指導のもとに戰禍は四川・湖南・福建・廣東の各地にひろがった。[80]」という。我々は軍閥政治史を革命史と切り離して考えるならば、たしかに呉の武力統一策への轉換が大々的に明確になるのは二十三年の三月であるという説明で滿足しよう。だが、我々はこの閒に革命史上、決定的重要性を持つ事件——京漢鐵道二・七慘案——が起っているのを見過すことはできない。そして、二・七慘案を考慮に入れるとき、呉の武力統一策への轉換が二十三年三月に起っているとした場合、革命運動の側にはもはや對處のしようのない呉の中國戰略の突然の轉換であったことになろう。呉の武力統一策への轉換は眞に突然で豫測不可能のものであったのだろうか。

呉佩孚の一連の動きをきわめて鋭く見抜いていた人物がいる。孫文である。彼は二十二年十二月二十八日の蔣介石への書函の中で、

> 近日呉佩孚は北京で政治に挫折し、四面楚歌となり、自救の計略を行なおうとしている。そこで長江の配下四・五萬人を糾合し、孫傳芳を總司令とし、福建に向けて發展させている。はじめ、江蘇の齊燮元、江西の蔡成勳はともに懷疑をいだいて反對したが、近頃すでに意志が疏通一致し、協力して福建を狙っている。[81]

と述べたのち、この軍事行動が陳炯明軍との孫文系軍隊に對する挾撃に發展する危險性を聲を大にして指摘し、國民黨軍の奮起を促している。周知の如く、この國民黨軍の動きは二十三年二月の大元帥府の成立へとつながっていく。それはともかく、孫傳芳の軍事行動の始まりは二十二年十一月二十三日のことであり[82]、曹錕の羅文幹攻撃の通電と同日、吳佩孚の曹錕への屈服の前日のことである。孫傳芳の軍事行動の開始はその準備期間をも考慮に入れるならば、吳が北京で政治に失敗したがゆえに起されたのではない。したがって、これをもってただちに武力統一策への轉換であると見なすことはできず、孫傳芳獨自の動き、あるいは吳の承認を得たものであっても中國の南北の政局を搖り動かし、全國の情勢に影響を與える動きと見なすことはできないであろう。が、しかし、この孫傳芳の動きが彼のみの動きでなく、江蘇の齊燮元、江西の蔡成勳との共同行動となった段階においてはすでに武力統一策への轉換であるとみなさざるを得ないのである。そして、この動きは『晨報』一九二二年十二月十八日の「吳佩孚は四川軍のこのたびの東下に對して防御策をとるだけでなく、この機會を利用して四川を討伐する意向である。」[83]とあるように東南方面のみ孤立的になされたものではなかったのである。

中央における政治を左右せんと意圖し、しかも、直接に中央における軍事力の威力による政治力の回復という方策を選擇しなかった以上、もはや吳佩孚にとっては中央ではなく、地方における軍事的勝利による政治力の回復の道しか殘されていなかったのである。そして、これはまた、一九二二年八月の時點における孫丹林の「二師團を使って廣州を直擊するだけですべての問題が無くなるだろう。」[84]という不遜な言に見られるごとく、主觀的にはきわめて容易に完遂せられ得るものであった。直隷派の政治的自殺行爲ともいうべき曹錕賄選へと急角度で進むであろう中央の動きを可及的速やかに阻止する必要が吳にはあったのである。かくして、王寵惠內閣の倒壞は必然的に吳の中國戰略に重大な變更を、すなわち、和平統一策から武力統一策への轉換、しかも急激な轉換をもたらすことになったのである。

もともと直隷派には日本の陸軍士官學校出身がほとんどおらず、舊式の軍事學校で學んだ軍人がほとんどすべてをしめ

ていた。(85) 吳が王內閣の倒壞を許したことは吳佩孚集團を形成していた新しい部分の崩壞を意味した。さらに先の孫丹林の不遜な武力統一策發動の言に胡適・蔡元培等が猛反發したこと(86)からわかるように名義のない戰爭發動は從來吳佩孚側に結集せんとしていた、それゆえ、それはまた吳の全國レヴェルでの政治力をも決定していた部分が吳から離反していく契機となった。かくして、王內閣の倒壞は吳集團の變質をもたらすことになったのである。

孫丹林らの豫測に反して吳の武力統一策が遲々として進捗しなかったのも、けだし、當然であった。この間、中央では曹錕が賄選への暴走を開始していた。したがって、曹錕・吳佩孚集團はその行動形態において二大分裂の狀態に陷いって行ったといえよう。たしかに吳は直隸派內において曹錕賄選に對して一度たりとも贊成したり推進したりしたことはなかったし、これ以後もない。だが、吳の主觀的意圖とは裏腹に、吳の武力統一策は客觀的には曹錕賄選を武力で全國に強要することを意味したのであり、もはや、吳の武力統一策は袁世凱や段祺瑞のそれと何ら選ぶところがなくなっていたのである。

今、軍閥を類型化して民族運動、あるいは民衆運動の波を何らかの形で受け入れ、あるいは利用していこうとする傾向のある軍閥を二十年代型の軍閥とし、それの見られないものを十年代型の軍閥とすると、その嚴しい軍事訓練及び民衆運動との政治・軍事的連關性を二大特色として勢力擴大の過程を步み、吳佩孚によりリードされてきた曹・吳集團は前者のみを殘し、後者を振りすてることにより十年代型軍閥へともどったのである。この意味で王內閣の倒壞は最終的には曹錕・吳佩孚集團の舊軍閥への全き回歸をもたらすことになったといえるのである。

以上、あらゆる意味において王內閣の倒壞は曹・吳集團にとり最大の轉換點となったのであり、一九二四年十月の第二次奉直戰爭における敗北、あるいは、そののちの國民革命期における吳佩孚軍の最大の反革命としての登場も、この轉換の單なる餘燼にすぎないのである。

## 註

（1）文公直『最近三十年中國軍事史』下、一一八―一一九頁（文星書店版）。

（2）『時報』一九二〇年九月二十日。

（3）陶菊隱『吳佩孚將軍傳』（中華書局、一九四一年四月）三一頁。

（4）吳佩孚に關しては詳細な傳記として、Odoric Y. K. Woo, *Militarism in Modern China, The Career of Wu P'ei-fu, 1916—39*, Australian National U. P. 1978 がある。他に蔣自強・余福美編『吳佩孚』（山東人民出版社、一九八五年）、郭劍林「吳佩孚評傳」（『近代中國人物』第二輯、中國社會科學出版社、一九八五年九月）、波多野善大『中國近代軍閥の研究』（河出書房新社、一九七三年七月）の諸論文、平野和由「民國期中國の支配構造――一九二〇年代前半の軍閥支配と民族運動」（『歷史學研究』別册特集、一九八二年度歷史學研究大會報告、一九八二年十一月）がある。また、當該時期の鐵道勞働運動と吳佩孚の關係を扱った好論文に高綱博文「中國鐵道勞働運動の發展とその構造――『二七』事件の基礎的考察」（『歷史評論』三二八、一九七七年）がある。

（5）清水安三『支那新人と黎明運動』（大阪屋號書店、大正十三年）五八頁。

（6）陸軍省『密大日記』「奉直再戰說ニ就テ」大正十二年四月十四日、なお、陸軍省『密大日記』に關しては、大正十五年第六册に「本史料は大東亞戰爭中、米軍が直接戰場で鹵獲し、又は內地進駐後、陸軍諸機關から押收した記錄文書の一つであって、長くワシントン郊外フランコニヤ等の記錄保管所に保管されていたが米國務省に對する日本政府の返還要求に應じ、昭和三十三年三月日本側に引渡され、四月十日防衛研修所戰史室の手に歸したものである。」とある。『密大日記』に含まれる情報の發信者は公使館附武官、各地の武官、關東軍參謀部、參謀本部、支那駐屯軍司令部、外務（領事）などであり、過半數を占めるのは公使館附武官からの情報であり、第二位が支那駐屯軍司令部からのものである。後出の「北支那軍事調查報告」は後者の作成に係る。地域別には華北が壓倒的に多く、東北がこれに次ぐ。華中・華南の情報はきわめて少ない。

（7）北京を握る大軍閥の中國戰略及びその轉換の構造が明らかになってはじめて關內の二極構造あるいは關外の奉天派をも含めて全中國における動態的三極構造も明らかになってこよう。その中間に位置する諸軍閥の對應――その最たるものが連省自治運動――の構造も明確化しよう。また、當該時期における諸黨派の情勢分析及びそれに基づいた方針も道義的硬直的評價から離れてその當否を歷史的現實との距離を以て判斷せられることになろう。

（8）章君穀『吳佩孚傳』（傳記文學出版社、一九六八年九月）一九二頁。

（9）丁文江『民國軍事近記』（北京商務印書館、民國十五年）一三頁。

（10）章君穀前揭書、二六〇頁。

（11）ジェローム・チェン譯書『軍紳政權　軍閥支配下の中國』（岩波書店、一九八四年）六四―六五頁。なお、この曹・吳集團の擴大に伴い、曹錕は直魯豫巡閱使（一九二〇年八月二十日～一九二三年十月十日）に、吳佩孚は同副使（一九二〇年九月二日～一九二一年八月九日）・兩湖巡閱使（一九二一年八月九日～一九二三年十一月十一日）にそれぞれ就任している。

（12）陶菊隱前揭書、五一頁。陶菊隱『北洋軍閥統治時期史話』（生活・讀書・新知三聯書店、一九八三年版）中、一〇八〇頁、（以下『史話』と略す）清水安三前揭書、六八頁。『密大日記』「貴志少將中支郵旅行報告」一九二四年八月二〇日。孫鐸「吳佩孚與國民黨」（『嚮導』第二十四期、一九二三年五月九日）なお、孫鐸はマーリン（Hendricus Sneevliet）の筆名（『馬林在中國有關資料』一頁。人民出版社、一九八〇年）。

（13）以下、岡野增次郎『吳佩孚』（大日本精神修養道場萬聖閣、一九三九年）第六章「左右の人物」による。

（14）白堅武「白堅武自撰小傳」（『近代史資料』一九八二年第一期）により補充。

（15）著名な外交家顏惠慶、顧維鈞はともに同大學卒であり、同大學は外交官の登龍門であったと考えられる。園田一龜『支那新人國記』（大阪屋號書店、一九二七年）一七八頁。

（16）園田前揭書、一五六―一五七頁。『中華民國史事紀要』民國十一年、八八〇―八八二頁。

（17）『胡適的日記』（中華書局、一九八五年）下、一九二二年六月十九日の條、三八三頁。『中國名人錄』には〝漢塵〟、『李大釗年譜』（同編寫組、甘肅人民出版社、一九八四年）一九二〇年十月十六日に〝漢忱〟、『辛亥以後十七年職官年表』及び楊家駱『民國名人圖鑑』（辭典館、一九三六―三七）は〝翰丞〟とするが經歷から見て明らかに同一人物を指している。

（18）前揭『胡適的日記』一九二二年六月十九日の條。

（19）Woo, *op. cit.*, chapter 7.

（20）岑學呂編『三水梁燕孫（士詒）先生年譜』（文海出版社、近代中國史料叢刊）下、一四二頁、一九二一年一月十九日の條。彼は「私はこの訪中において完全にアメリカの銀行を代表する權利を持っている。」と言っている。

（21）芮恩施「對于中國時局之建議」（『東方雜誌』第十七卷第十八號）。

（22）チェン前揭書、第九章。

（23）「白堅武自撰小傳」。

（24）T'ang Leang-li, *The Inner History of the Chinese Revolution*, London, 1930, p.144. 李劍農『中國近百年政治史』（臺灣商務印書館、一九七七年版）、五七二―五七三頁。

（25）和森「目下時局與國際帝國主義」（『嚮導』第六期、一九二二年十月十八日）。

（26）『顧維鈞回憶錄1』、二四四頁。

（27）『史話』下、一一九〇頁。

（28）『史話』下、一一七一頁。

（29）陶菊隱前揭書、八三頁。

（30）Chang Kuo-t'ao, *The Rise of the Chinese Communist*

*Party*, The U. P. of Kansas, 1971, vol. 1, p. 266.

(31) 『史話』下、一一九六頁。
(32) 章君穀前掲書、三四六頁。
(33) 『史話』下、一一七一頁。
(34) 章君穀前掲書、三四六頁。
(35) 『史話』下、一二七五頁。
(36) 王維城「直系的分裂和二次直奉戰爭直系的失敗」(『北洋軍閥史料選輯』中國社會科學出版社、一九八一年)下、九二一一〇四頁。
(37) 『史話』下、一二七五頁。
(38) 『中華民國史事紀要』、民國十一年八月十四日、三〇六頁。
(39) 『史話』下、一一九四頁。
(40) 李泰芬『國民軍史稿』(一九三〇年。中國近代史資料叢編之七『西北軍紀實(一九二四—一九三〇年)』所收、大東圖書公司、一九七八年)七三頁。
(41) 馮玉祥『我的生活』(上海教育書店、民國三十六年)四五五頁。
(42) 李泰芬前掲書、七〇頁。また、劉汝明『劉汝明回憶錄』(傳記文學出版社、民國五十五年)四四頁。
(43) 張紹程「張紹曾事迹回憶」(『文史資料選輯』第三十輯、一九六二年九月)。
(44) 馮玉祥前掲書、四五七頁。
(45) 同書、四五六頁。
(46) 同書、四五九頁。
(47) 白堅武「第二次奉直戰日記」(『近代史資料』一九八二年第一期)。
(48) 『史話』下、一一九二頁。
(49) 馮玉祥前掲書、四六〇—四六一頁。
(50) 李泰芬前掲書、七五頁。また、高興亜『馮玉祥將軍』(北京出版社、一九八二年)一三三頁に類似の記述がある。
(51) 李泰芬前掲書、七五頁。
(52) 『密大日記』「北支那軍事調査報告」大正十二年五月末日調の第十一師の所。
(53) 劉驥・鄧哲熙「馮玉祥督豫前後」(『文史資料選輯』第三十五輯、一九六三年五月)。
(54) 李泰芬前掲書、七七—七九頁。
(55) 章君穀前掲書、四五二頁。
(56) 文公直前掲書、上、第二編、一九—二四頁。
(57) Woo, *op. cit.*, p. 117.
(58) いかにこのクーデタが巧妙であったかは代表的研究書がほぼすべて見當違いの評價を下していることを見ても明らかである。(1)文公直は「北京政府は曹錕・吳佩孚が馮玉祥の勢力擴大を恐れたことにより、北京へ移動させて陸軍檢閱使に任じた。」(文公直前掲書、上、第二編一三—一四頁)とし、(2)章君穀は「當時、保府(曹錕)と洛吳(吳佩孚)はすでに龜裂が見られたが、まだ表面に現われておらず、とりわけ馮玉祥排斥に關しては保・洛の意見は一致していた。」(章君穀前掲書、五二九頁)とし、(3)布施勝治は「當時の曹錕や吳佩孚等の意圖は馮玉祥を陸軍檢閱使の空位にまつり上げ、その軍隊の補給口を塞ぎ、以てその實力の自然消滅をはかったの

である。」（『支那國民革命と馮玉祥』五四頁、大阪屋號書店昭和四年）とする。(4)波多野善大氏は「二十二年十月末、吳佩孚は黎大總統にせまり、馮玉祥を陸軍檢閱使として北京の南苑に移駐させた。」（波多野前揭書、四〇二頁）とし、(5)李劍農は「馮氏は兵を有するが地盤がなく、出路のない北京に駐屯し、吳の支配を聽かねばならなかった。吳氏はこれを雄才を統御する妙策だと考え、これが內部勢力に龜裂が入る起點であることがわからなかった。」（李劍農前揭書、六五一頁）としている。

(59) James E. Sheridan, *Chinese Warlord, The Career of Feng Yü-hsiang*, Stanford U. P., 1966, p. 118.

(60) 『顧維鈞回憶錄1』二四五—二四六頁。

(61) 神谷正男編『宗方小太郎文書、正編』（原書房、一九七五年）「報告第六百二十七號、大正十一年十二月八日」。

(62) 『史話』下、一二二—一二三頁。李劍農前揭書、五九五頁。

(63) 岡野前揭書、五二二—五二三頁。

(64) 以下、注記しない限り宓汝成『帝國主義與中國鐵路 一八四七—一九四九』（上海人民出版社、一九八〇年）による。

(65) 章君穀前揭書、四五八頁。

(66) 『時報』一九二二年七月二十九日「曹錕交出京漢路北段之代價」。

(67) 岡野前揭書、三八〇頁。

(68) 岑學呂編前揭書、第二册、一六二頁。

(69)(70) それぞれ安徽派の段祺瑞と徐樹錚が長官であり、安直戰爭後撤廢された。錢實甫『北洋政府時期的政治制度』（中華書局、一九八四年）上、二〇三—二〇四頁。

(71) 『史話』下、一二〇六頁。『晨報』一九二二年十二月八日「請看高恩洪供給軍閥之餉款」。

(72) 章君穀前揭書、四七八頁。

(73) 『史話』下、一一八四—八五頁。

(74) チェン前揭書、一一八頁。

(75) 『史話』下、一一八五頁。

(76) 『密大日記』一九二三年二月二十一日「交通借款ニ就テ」。

(77) Woo, *op. cit.*, chapter 8 'Relations with the Soviet Union, the Chinese Communists and Sun Yat-sen' には孫文・吳佩孚の合作が實現直前の狀況まで進んだが王內閣の崩壞で挫折したと論じられているが、あまりにもコミンテルン及び中國共產黨の資料に依りすぎ、孫文及び吳佩孚の戰略を輕視していると思われる。なお、〝孫吳合作〟に關しては村田雄二郎「李大釗と「孫吳合作」——吳佩孚との關係を中心に」（『猫頭鷹 近代中國の思想と文學』第四號、一九八五年十二月）參照。

(78) 「復張學良函」（『孫中山全集』第六卷、中華書局、一九八五年）五五七頁。〝尊公〟は張作霖のこと。

(79) 羅家倫主編、黃季陸增訂『國父年譜』（民國五十八年）下、九一〇頁、九一一頁。

(80) 胡繩『中國近代史 一八四〇—一九二四』（平凡社、一九七四年）二八五頁。また、Sheridan, *op. cit.*, p. 125 には「一九二三年初の數箇月間、軍事場裡においては吳は大いに

活發であった」とある。

(81) 「致蔣中正函」(『孫中山全集』第六巻) 六四六頁。

(82) 郭廷以編著『中華民國史事日誌 第一册』(中央研究院近代史研究所、中華民國六十八年)。

(83) 『晨報』一九二二年十二月二十八日「吳佩孚有意攻川」。

(84) 『胡適的日記』下、一九二二年八月十四日の條、四二九頁。

(85) 園田前掲書、四五頁。

(86) 註(84)に同じ。

## SECRETARIAT EXAMINERS 中書檢正官
## —Supporters of Wang Anshi's Administration—

KUMAMOTO Takashi

Above all Wang Anshi possessed rationality, a characteristics of Northern-Sung scholars. When we try to throw light not on his individual policies, but on the administrative procedure controling them, 'Secretariat examiners' supply us with instructive information.

They were first-class scholars, not only well-educated, but also competent to conduct business efficiently. Through them, Wang Anshi held actual power over the government. It is worth mentioning that each of the general directors of the Court of National Granaries 司農寺, which promoted the New Laws, concurrently held the post of 'Secretariat examiners', and that almost all the statutes were announced by way of them.

However, centralizing power on the prime minister in order to increase administrative efficiency brought about friction with the absolute monarchy. After Wang's downfall, when Shentsung himself controlled the government, 'Secretariat examiners' were no more than clerks. The rejection of Wang's rationalism shows the limits of 'progressiveness' in late imperial China.

## THE RISE AND FALL OF THE CAO KUN 曹錕—
## WU PEIFU 吳佩孚 FACTION

MATSUO Yoji

Wu Peifu was admired as a "Revolutionary general" in the period of the May Fourth Movement. But after only a few years, in the period of the National Revolution, he became the biggest counterrevolutionary, and was defeated by the National Revolutionary Army. What brought about this military-political fall of Wu Peifu?

By introducing the idea of a 'Strategy of Unifying China' and in-

quiring into changes in it, this essay attempts to answer this question.

The author's conclusions are as follows:

The Wang Chonghui 王寵惠 cabinet which Wu Peifu supported collapsed at the end of November 1922.

This was the result of the coup d'etat in which Cao Kun, Wang Chengbin 王承斌 and Feng Yuxiang 馮玉祥 formed a united front against Wu Peifu. The collapse lead to a change in the strategy. And this change brought about a complete retrogression of the Cao Kun-Wu Peifu faction into a warlord faction of old type.

## RŪM SALṬANAT AND KHWĀRAZMSHĀH

ITANI Kozo

The last Khwārazmshāh Jalāl al-Dīn was the greatest "hero" against the Mongol invasion in West Asia. His energetic military operations extended from Kirmān to Rūm (Asia Minor or Anatolia). Five contemporary historians, being Ibn al-Athīr, al-Nasawī, Juwaynī, Ibn Bībī and al-Ḥamawī recorded his activity in detail. These historical sources lead us to the following conclusion.

Jalāl al-Dīn's vigorous operations against Georgians since his appearance in Ādharbayjān (1225) were highly estimated by Muslim authors. But when he entered into an alliance with al-Mu'aẓẓam, son of al-'Ādil b. Ayyūb, Jalāl al-Dīn was involved in a rivalry between al-Mu'aẓẓam and al-Ashraf, another son of al-'Ādil. After his first siege of Akhlāṭ, an important city in Armenia ruled by a deputy of al-Ashraf, Khwārazmians were accused of their "evilness of behavior" by Ibn al-Athīr. 'Alā' al-Dīn Kayqubād, Sulṭān of Rūm was related by marriage to al-Ashraf and al-Kāmil, ruler of Egypt, in 1227. After the capture of Akhlāṭ by Jalāl al-Dīn (1230) and his alliance with the ruler of Arzan al-Rūm, cousin of Kayqubād, Rūm Salṭanat and the house of Ayyūb formed an alliance against Jalāl al-Dīn. Finally Jalāl al-Dīn was defeated by the allied forces at Yassï Chaman, near Arzinjān on 28 Ramaḍān 627 A. H. (10. 8. 1230). He could never recover from this defeat and a year later was to be killed